大学体育への学生の意識・態度に関する一考察
－本学学生の調査から－

小泉昌幸*

（平成１８年１０月３１日　受理）

A Study of the Students' Awareness and Attitude of Physical Education Course in NIIT

Masayuki KOIZUMI*

The purpose of this study is to investigate the students' awareness and attitude of physical education course at the Niigata Institute of Technology. In order to carry out this study, a questionnaire was administered to 194 first-year students.

The main results were as follows:

1. Many students did not know that there was the physical education course at a university. It is necessary for students to learn high expertise and the physical education course in a university.
2. Students recognize physical education to be a high class of necessity.
3. Students realize that physical education course functions on the physical and the mental.
4. Students are satisfied with contents of the physical education course.
5. Teachers must perform the physical education course to lead to lifelong sports of students.

Key words: physical education course, necessity, students' awareness and attitude

1.　はじめに

平成３年までは大学設置基準において，大学の開設する授業科目を「一般教育科目」，「専門教育科目」，「外国語科目」，「保健体育科目」に区分すべきこと，また，それぞれの科目について卒業までに修得すべき単位数などを定めていたところを，個々の大学が社会の要請に適切に対応しつつ，より一層特色ある教育研究を展開することができるようにするため，これらの開設授業科目の区分や必修単位数などに関する規定を撤廃した．代わりに，1.大学は，その教育上の目的を達成するために必要な授業科目を開設し，体系的に教育課程を編成すること　2.大学は，教育課程を編成するにあたっては，学部などの専攻についての専門の学芸を教授するとともに，幅広く深い教養と総合的な判断力を培い，

*体育学　助教授

豊かな人間性を涵養するよう適切な配慮をすることという 2 点を規定するのみに留めた．これが一般に「設置基準の大綱化」と言われているものである[5]．この改正によって保健体育科目の開講は,これまでの設置基準で定められた必修科目から各大学の自主的な判断にゆだねられることになった.このような動向は,これまで大学教育における必修科目としての保健体育の重要性,必然性が十分に検討されてこなかったことの反映にほかならないといえる.

現代社会は運動不足,ストレス等社会生活における非健康的要因が増大してきている[7].健康問題は高齢化社会を迎える我が国において社会的関心を集めている．このような状況において,自ら心身の健康を維持向上していく能力を身につけておくことは,学校教育においても重要な課題である[2].

また前川は，体育を「身体活動を通して行われる教育である」と定義している[4]．さらに，「本来的には，人生のあらゆる年代にわたって行われるものであり，その範囲は，単に学校のみに限ることなく，むしろ，あらゆる社会においておこなわれるものである」と述べ，体育の存在場面を広く規定している[4]．

大学体育実技は,一般的に学生が健康･体力の維持増進をはかり健康な修学生活を送り,授業を通して身体運動の重要性の認識やその実践については，文化的，社会的側面から体育に関する知識を深め，健康的なライフスタイルを確立させるなど，実生活に役たてる目的を持っている．そして高等教育の「大衆化」やスポーツに対する国民のニーズの高まり,生涯学習社会の進展,スポーツ科学・健康科学の発展等の社会変化に対応するうえからも 21 世紀において一層充実される必要度の高いものである[6].

このような社会的認識が,大学体育の存在理由となっている.そして高齢化社会を迎えた現在，体育の必要性をどのように訴えることができるのかが課題である.

本学の体育実技授業の目的は,

１．健康・運動科学に関する知識を理解し，スポーツ活動を実践することにより，基礎的な体力とボディコントロール能力の向上を目指す.

２．生涯を通じて継続的にスポーツ活動を楽しみ，実践するための基礎的な技能を習得し，健康的な生活態度を身につけることを目指す.

３．スポーツ活動の場を共に作り上げ，スポーツ活動の楽しさを仲間と共有する喜びを味わえるようする.

４．スポーツ活動において社会的スキルを高め，学生生活で自立的に人間関係を形成・維持・発展させ，適切に学校適応ができるようにする.

である.

この目的に対応する体育授業を展開するために，大学体育の指導目的が高等学校までのそれと違うこと，体育が単なるスポーツ指導ではないことをはっきりと示すこと[3]．そして教師自らの教育理念･目的を明らかにし,より魅力ある大学の体育授業とはどのようなものかという視点で,大学体育の取り組みについて多様な創意工夫を行うことが一層重要になっていくものと思われる.

本研究は,「教育としての体育」[1] をより充実するという立場から，大学体育の現状を明らかにし，体育授業の必要性を規定する要因を分析し，学生が体育実技へどのような意識・態度を有しているのかを明らかにすることを目的としている.

具体的には,体育授業がどのような価値を持ち,受け入れられているのかという視点から,学生が判断する体育授業の機能的側面や価値意識・態度を規定する要因を究明していくことである．そして学生のために質の高い体育授業を展開する際に配慮するさまざまな点を明らかにしていくことで体育授業の質的向上を図り，本学におけるより望ましい体育のあり方を考える基礎資料としたい.

2．研究の方法

本学学生 1 年生 232 名を対象として,2006 年 7 月に質問紙法による調査を行った.　調査の方法は,授業時間を利用して,集団記入の形式で,調査者が説明をしながら実施した．記入漏れ,記入ミスのあったものを除き,有効回答数 194，有効回収率 83.6%であった.

3．結果と考察

Table1 は,大学で体育授業があることを知っていたかどうかについてみた結果である.大学において体育の授業があると知っていた学生は 44.3%，体育の授業はないと思っていた学生は 55.7%であった．半数以上の学生は大学体育の存在さえも知らなかったことになる．工業系の単科大学ということもあり，大学では専門的な授業ばかりと考えていたのではないかと考えられる.

table 1 Presence of university physical education course

	%
Know	44.3
Did not know	55.7

Table2 は,体育実技は必要かどうかについて示したものである.

体育実技の必要性を認めている学生は,61.3%,必要性を認めていない学生は,10.8%であった．学生にとって体育実技は必要性の高い授業であると認識されていることが推察できる.

Table3 は,体育授業に関するとらえ方について操作的に 9 項目であらわし,それぞれの項目に対して,「5 非常に価値を認める」「4 やや価値を認める」「3 どちらともいえない」「2 あまり価値を認めない」「1 全く価値を認めない」とした 5 段階評定により回答を求め,その平均値を示したものである.平均値が 4.00 以上の高い値を示したものは,「運動不足の解消」の 1 項目であった．また，他の 8 項目については平均値が 3.00 以上の値を示した．その中でも「体を動かす楽しさを知る」「ストレス解消」と

table 2 The necessity of university physical education course

	%
necessary	61.3
unnecessary	10.8
neither	27.8

いう項目は 4.00 に近い値を示している.この結果は,学生にとって体育実技の授業は,楽しく身体を動かし,それによって運動不足の解消，ストレスの発散へと結びついているのではないかと考えられる.

体育実技の授業は，身体的側面ばかりでなく,精神的側面において機能していることが推察できる.

table 3　Value of university physical education course

	mean
Core subject	3.3299
Pleasure	3.9536
Make up for lack of exercise	4.1856
Friends	3.9742
Lifelong sport	3.0670
Skill	3.3763
Improvement in physical strength	3.6701
Stress release	3.9588
Credit	3.7887

Table4 は体育実技の必要性について,その価値との関連について示したものである.「体を動かす楽しさを知る」「スポーツ技術の向上」「友人を得たり,交流の場」「生涯を通じて行うスポーツを見つける場」「運動不足の解消」「体力の向上」「気晴らし,ストレスの解消」の 7 項目において関連が認められた. その中でも強く関連を規定する要因として「体を動かす楽しさを知る」「友人を得たり，交流の場」「生涯を通じて行うスポーツを見つける場」「運動不足の解消」「気晴らし，ストレスの解消」があげられた.これは,学生が授業において同じクラスの仲間と楽しみながら運動することがストレスの解消につながり，身体的にも精神的にも運動することの価値を実感できたからではないかと考える.「体力の向上」「スポーツ技術の習得」という点に関して関連が見られたが，週 1 回の実技の授業では学生自身が満足するほど実感できていないのではないかと考えられる.「卒業のための単位」の項目については，Table5 の大学体育実技が選択科目であった場合履修するか否かについて聞いた質問とあわせて考えてみると，63.4%の学生が選択科目であっても履修するとしている．このことから考えると，学生はただ単に体育実技の授業を「卒業のための単位」と考えていないのではないかと考える.しかし,「履修しない」と「どちらともいえない」と回答した学生があわせて 36.6%いたことも事実で，これらの学生が満足するような授業を展開していくことが今後の課題であ

table 4 Value and necessity of physical education course

	Chi-square	Significance
Core subject	12.03882	
Pleasure	33.69855	**
Make up for lack of exercise	40.60776	**
Friends	25.79677	**
Lifelong sport	32.75019	**
Skill	18.21936	*
Improvement in physical strength	19.65750	*
Stress release	31.74619	**
Credit	5.94545	

** p<0.01　　* p<0.05

るといえる.

Table6 は,体育実技授業の必要性と授業内容の満足感についてみたものである．この項目間に有意な関連があることが認められた.これは,体育実技の授業が必要であると考えている学生に関しては，ある程度満足感を得られるような授業を展開しているからではないかと考えることができる．受講するすべての学生に満足感を感じさせるようにするために，少しでもより良い授業内容の構成，方法を考え学生に提供していかなければならと考える．そのために,教師が授業（取り上げる教材）の目的,目標,特性を十分に理解し,基礎から応用まで,生徒の能力に応じて適切に指導できる技能を身につけていなければならないといえる.

table 5 The requirement of university physical education course

	%
required	63.4
not required	14.9
neither	21.7

教師は,学生が現在体育実技で自分の選択している運動の技能を一層向上させ,その運動の持っている特性により深く触れさせることによって,運動の継続的な実践を促すようにしなければならない.つまり,学生に対して体育授業時に各教材の目的を明確に提示し,理解を深めさせ,学生が興味・関心を持つ事のできるような授業の進め方をするようしなければならない.

table 6　Necessity and degree of satisfaction　of physical education course (Contents of a class)

	Satisfactory	Dissatisfied	neither
necessary	67	14	18
unnecessary	5	19	4
neither	15	17	35

$\chi^2=66.344004$　　$p<0.01$

4．まとめ

本研究は,教育としての体育をより充実するという立場から,学生が体育実技へどのような意識・態度を有しているのかについて検討を進めてきた.

その結果,以下のようなことが提示された.

１.本学の高校生向け大学ガイドブックにも体育実技科目が記載されているにもかかわらず半数以上の学生が体育実技授業の存在を知らなかった.

２．学生は体育実技授業を受講し，大学において必要性の高い授業であると認識している.

３．学生は運動不足の解消，体を動かすことの楽しさ,という身体的側面ばかりでなく,ストレスの解消という精神的側面においても体育実技が機能していと実感していることが明らかになった.

４.体育実技はその授業内容が学生にとって満足感を得ることのできる授業であった.その結果として学生は,体育実技が選択の授業であっても履修するという意識を有していることが明らかになった.

５.現在開講している授業内容については,学生の希望とほぼ一致していることがわかった．これは，学生自身が生涯体育をどのように取り組んでいけばよいのかを考える上で重要なことであると考える．そして今後も授業内容の構成に修正を加えさらにより良い授業を展開していかなければならないといえる.

本学は工科系大学ということもあり，専門色の強いことは確かである．高度な専門的知識を学習することは当然のことであるが，同時に身体に関する教育も必要なはずであると考える.

以上のように学生は体育実技の授業を支持しているが，さらに本学体育実技授業の目的に合致するよう，授業内容の質的向上をさらに図り，より望ましい保健体育科目の構築を進めていきたい.

References

1）阿部忍.「体育の哲学的探究」.2.6-11.道和書院:東京.1984
2）岩崎義正.「大学における保健体育のあり方」に関する調査報告．大学体育: 30.13(3).33－41．1987
3）神山雄一郎.「大学における体育」．学校教育における体育. http://www.gpwu.ac.jp/door/kamiyama/kenkou1-6.html
4）前川峯雄.「体育原理」．9.72－73．大修館:東京.1970
5）文部科学省.大学設置基準:6-19.2006
6）奈良雅之・小原晃・加藤純一・本間玖美子.「大学教育における保健体育の成績評価の現状に関する研究－科目名の違いによる内容の分析を中心に－」.文部省科学研究費補助金（基盤Ｃ（２））研究成果報告書：3-4．2000
7）戸田修三保健体育のあり方研究委員会報告書（修正案).（財）大学基準協会．1989